

Great Expectations

ピップのアイデンティティと回顧的語り

key words: 階級をめぐるアイデンティティ、回顧的語り、罪の意識、倫理的境界線、本当の紳士

1. ピップの語り

Great Expectations (1861)は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の子供時代と関連づけられる場所で始まり終わる。作品に出てくるピップ(Pip)の村は、ケント(Kent)州、ロチェスター(Rochester)の数マイル北のクーリング(Cooling)に基づいて描かれていると考えられている。また、サティスハウス(Satis House)は、ロチェスター大聖堂の近くのエリザベス朝様式の大邸宅に基づいて描かれている。ディケンズは、ロチェスターの隣町のチャタム(Chatam)で子供時代を過ごし、*Great Expectations* を書き始めたとき、チャタムで再び生活していた。1856年ディケンズは、チャタムの町はずれにギャズ・ヒル・プレイス(Gad's Hill Place)と呼ばれる大きな家を購入した。このギャズ・ヒル・プレイスは、かつてディケンズが父親とともにしばしば歩いた急な坂のてっぺんにあった。父親に「一生懸命やればいつの日かお前もあそこに住むことができるかもしれないよ」と言われていたこともあり、この家を手に入れることがディケンズの子供時代の夢であった(Martin 25)。このことから *Great Expectations* 執筆に際し、ディケンズが自身の子供時代を作品との関連で思い出し、自身の当時の心境を無意識にピップの心理に描き出したと考えられる。

ディケンズがピップの心理状態を描き出すことにおいて工夫していることは、ピップの語りである。グラハム・マーティン(Graham Martin)が指摘しているように、語り手としてのピップが教会付属の墓地のできごとを語ることから初め、年代順に語る *Great Expectations* は、大人であるピップが過去のできごとを回顧して語る自伝的形式をとっている(Martin 5-6)。スティーブン・コナー(Steven Connor)は、「*Great*

Expectations には、物語を語る成熟したピップといろいろなできごとを見、それに参加する若いピップといった二つの視点がある。例えば、小説の最初のパラグラフにおいて何も知らない子供のものであるかのような視点や知覚と何でも知っていて興味深く上から下をながめるような語りが見られる。」と説明している(Connor 166)。ピップの語りは、ピップの子供時代の心理状態がいかにか大人になっていく過程に影響を与えているかという因果関係を説明する上で効果的に働いている。

このようなピップの語りは、現在に至るまで批評家によって注目されてきた問題であり、マーティンが指摘しているようにピップの過去に対する考えを書きとめておくことは、何が現在のピップを形成したかということを読者に考えさせる側面を持っている(Martin 6)。一方で、ピップの語りと階級をめぐるアイデンティティの問題については深く論じられていないように思われる。第 19 章の最後で「以上で、ピップの遺産相続の見込みの第一段階を終わる」(152)と語る前のピップは、村のアイデンティティ、労働者階級のアイデンティティから抜け出していないが、第 20 章以降はロンドンでのアイデンティティ、紳士階級としてのアイデンティティが混在することとなる。このことを考えると、ピップの語りを論ずる場合、もう少しピップの階級をめぐるアイデンティティに注目してもよいと考えられる。本論文では、ピップの過去と現在の因果関係に注目しつつ、ピップの語りと階級をめぐるアイデンティティの関係について述べてみたい。

2. ピップの子供時代とアイデンティティ

Great Expectations のプロットについて考えるとき、マーティンが指摘しているように物語は二つの主要なできごと(ピップの囚人との出会いと、サティスハウスに導かれること)とその結末に依存している(Martin 5)。このことから作品をピップの二つの主要なできごとがあった子供時代とそれ以後に分けて考えることができる。

まず、ピップの子供時代についてであるが、ピップの囚人との出会いは、彼の罪の意識と密接に関係する一方、逆らいがたい運命と言っても

いい。ピップは、教会付属の墓地に突然現れたマグウィッチ(Magwitch)に強制的にやすりと食べ物を持ってくるように言われる。ディケンズは、ピップの語りを通して彼が恐怖感からやむをえずそうせざるを得なかった状況を説明している。マグウィッチは、ピップにやすりと食べ物を自分のところへ持って来るように言い、自分のことを他人にもらしてはならない、「もしそうしなかったら、神さまわたしをぶち殺してしてください、と言ってみろ！」(4)と言い、ピップに無理矢理その言葉を言わせる。やむを得ずピップは食事のとき自分のパンをズボンに押し込むが、「良心というものは、大人なり子供なりを呵責するとなると、まことにもって恐ろしいものである。だが少年の場合に、その秘密が彼のズボンの中にひそませたもう一つの秘密と合体するとき、それは重大な懲罰である。」(10)という語りは、マグウィッチに強制的に追い込まれた状況にもかかわらず、ピップが子供ながら罪の意識を持っていることを示している。ただ、パンをズボンに隠した後、食料室で他の食べ物を盗むことを予測して、「自分はミセス・ジョーのものを盗もうとしているのだという罪の自覚に襲われたが、ジョーのものを盗もうとしているのだとは少しも思わなかった。」(10)、と語ることにより、ピップがミセス・ジョーに心理的脅威を感じるがゆえに罪の意識を持っていることは明らかである。なぜなら、ピップの家では彼の姉がジョーと彼を支配していて、ピップが説明するように、二人は受難者と言ってもいい存在だったからだ。

マグウィッチとミセス・ジョーの力は最初暴力的・威圧的の力としてピップを支配しているが、その力は彼がサティスハウスに出入りすることにより階級的力に変化する。家での姉の養育がピップを神経過敏な子供にし、彼は姉がありとあらゆる処罰、屈辱、絶食、寝ずの夜、懲罰的苦行といった非道な仕打ちを彼に対してしたことを知っているが、サティスハウスではエステラ(Estella)の行為が姉の行為に取ってかわる。エステラがピップに対して言う言葉、「いやしい労働者の子供」、「なんてざらざらした手をしているの！それになんて厚いどた靴なの！」(55)は、ピップに労働者階級にいることに対し劣等感を感じさせる言葉である。

また、ピップにパンと肉とジョッキいっぱいビールを与えるときのエステラの態度は、ピップを侮辱され、傷つけられ、足蹴にされたような気持ちにさせる。彼女はジョッキを庭の石の上において、ピップの方へは目もくれずに、まるでしかられた犬にでもやるように横柄な態度でパンを与えるからである。

村からサティスハウスのある町へ移動することにより、ピップは階級的アイデンティティを強く認識する一方で、労働者階級としてのアイデンティティを恥かしく思うようになる。もともとサティスハウスへ行くことはピップの意志でなく、ミス・ハヴィシャムに望まれて決定されたことであるが、ミス・ハヴィシャムとエステラが人生に介入してくることにより、ピップの人生も変化する。アニー・サドリン(Anny Sadlin)は、*Oliver Twist* (1837)と *Great Expectations* を比較し、ヒーローの身分と語りの技法の違いを見てとり、両者ともおとぎ話のヒーローとしての側面があることを指摘する一方、オリヴァー(Oliver)がプロットを先に進めたり自身の体験を語ったりすることに役割を果たしていない一方で、ピップが起こったこと全てと語られる方法に責任を持たされている、と述べている(Sadlin 88)。サドリンの指摘は、特にオリヴァーとピップの過去と現在の心理的因果関係の語りを比較した場合の違いについての指摘であると言える。オリヴァーの場合、過去と現在の心理的因果関係が明白に語られていない一方、ピップの場合両者の因果関係が明白に語られているからである。例えば、第14章の冒頭のピップの語りは、ピップの心がミス・ハヴィシャムとエステラの介入を通して完全に階級によって支配されていることを示している一方で、ピップの未来の結末をも暗示している。ピップの語りは、彼が家庭を恥じることの懲罰の可能性を感じていることを示しているが、このことは後にピップが紳士階級から陥落することをも暗示していて、ピップの語りが階級をめぐる彼のアイデンティティと密接に関係していることは明らかである。ピップはトランプゲーム *Beggar My Neighbor* でエステラに無一文にされ、ジョーとともにオールド・クレム(Old Clem)を歌っているとき、ミス・ハヴィシャムの屋敷でその歌を歌ったこととエステラのさげすむ

ような目を思い出すが、傷つけられ劣等感を飢えつけられることにより、エステラが自分から程遠い人間のように思え、階級的に上昇したいという願望を持つようになる。ジャガーズ(Jaggers)に遺産相続の見込みについて告げられたとき、ピップは自身の夢が実現したと考え、ミス・ハヴィシャムが自身をすばらしい大金持ちにしようとしている、と考えるが、彼の階級意識は、サティスハウスに出入りすることなしには生まれることはなかったのであり、かつて自分が助けた囚人マグウィッチの金で紳士階級の仲間入りができたとしても、ピップがこの時点でミス・ハヴィシャムが恩人であると考えすることは、不自然なことではないのだ。ジャガーズは、ピップの大いなる遺産について告げるとき、「まず、君はロンドンに行くため服を新調しなくちゃならん。そりゃ労働服じゃまずいんだ。」(133)と言うが、バーナード・ビーティ(Bernard Beatty)がカーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)の「一人の人間が仕立屋によって新しく高貴な人間に創造され、単に羊毛のみならず、威厳と神秘的な支配権とを付与される」(Carlyle 219)という *Sartor Resartus* (1834)からの文を引き合いに出して説明しているように、ピップが服を変えるという行為は、紳士として新しい服を着ることを意味する(Beatty 45)。新しい服を着ることにより、ピップは自分自身を彼の生まれから切り離し、今や自分がサティスハウスの住人と同じ身分になったと考える。ピップが労働者階級から紳士階級へのアイデンティティの移行を認識するのは、トラップ(Trabb)がピップが帰るときドアを開けずに殴り倒されることである。ピップはこのことに関し、「わたしがものすごい金の威力をはっきり知った最初の経験は、それが実際にトラップの小僧を仰向けに打ち倒したということだった」(144)と語るが、ピップの語りは、彼が階級的な力を認識したことをも意味している。

しかし、一方でピップの心理状態がジャガーズから遺産相続の見込みを告げられるまで、階級のはざままで揺り動いていることを見落とすことはできない。ピップはビディ(Biddy)に対し、エステラの美しさに抗し難いまでに引き付けられているという心境を告白し「あの人のために紳士になりたいと思うんだ」(122)と言うが、ビディは「もしあなたが紳

士になりたいという理由が彼女を自分のものにするためだったら、その人は自分のものにする値打ちのない人だと思ふの」(122)と言う。ピップは、ビディの言っていることをもっともだと思い、ビディと一緒に夏の美しい夕べを歩いているとき、「このような環境にいる方が、時計がごとごととまっている部屋で、ロウソクの光に照らされ、エステラにさげすまれながら *Beggar My Neighbor* をやるよりは、結局自分にとって、いっそう自然で、いっそう健全なことではないだろうかと思うようになった。」(123)と語り、自分にとっての自然な状態について考えをめぐらすが、一方で自身の心境について「最もすぐれた、最も聡明な人間さえ、毎日おちいっているあの不思議な矛盾を、幻惑された哀れな田舎者にすぎないわたしに、どうして避けることができることができたろうか？」(122)と語ることにより自身の心の中に自然体であることを望む一方で、紳士階級の仲間入りをしたいという抗し難い願望があったことを説明している。ピップの状態は、労働者階級から紳士階級への越境に際してのアイデンティティの危機と言ってもよく、ピップがロンドンへの出発の直前、家の粗末な部屋で自身の心が粗末な部屋とこれから行く身分の高い人間にふさわしい立派な部屋との間に引き裂かれていて、それはちょうど鍛冶場とミス・ハヴィシャムのお屋敷、ビディとエステラとのあいだに引き裂かされたのと、ちっとも違わなかった、と語ることにより、読者は、ピップの心理状態を詳しく知ることができるのだ。このようなピップの語りは、かつての彼の心境をよく説明している一方で、自己弁解としての側面も持っている。

3. 紳士階級への仲間入りと回顧的語り

これまでみてきたように、ピップの子供時代は最初マグウィッチや姉の暴力的・威圧的力に支配されてきたが、次第にその力は、ミス・ハヴィシャムとエステラの介入により階級的力へと変化する。このような心理的变化をピップの語りはやむをえなかったものとして自己弁解的に述べているが、紳士階級の仲間入りをしてからその語りは変化する。それは、ピップが紳士としての倫理を意識し始めるためである。ピップは、

紳士としての教育をパブリック・スクールのハロー(Harrow)校とケンブリッジ(Cambridge)大学で教育を受けたマシュー・ポケット(Matthew Pocket)から受けるが、息子のハーバート(Herbert)からミス・ハヴィシャムについての話の最中、父親の持論「心根の立派でない男が態度の立派な真の紳士になったためしは、この世が始まって以来いまだかつてない」(171)を聞かされる。しかし、紳士階級の仲間入りをしたピップは、尊敬するマシュー・ポケットの言葉に反するような気持ちを持つようになっている。なぜなら、ビディからジョーのロンドン訪問の知らせを受けたとき、ピップは、「もし金で彼を遠ざけておくことができたとしたら、私はきっと金を出したことだろう」(206)という気持ちを持つからであり、「あなたはあなたの運命や将来の見込みが変わってから、お友だちを変えてしまったのね？」(223)とエステラから尋ねられたときも、「もちろんです」(223)と答えるからである。ジョーが階級的違いを強調し、「おまえとわしはロンドンで一緒になるべきじゃないんだ」(212)と言って帰ってしまった後、ピップは、悔恨の情に襲われ友情を回復すべく故郷へ向かうが、予期されない訪問はジョーに迷惑をかけることになる、ミス・ハヴィシャムの気にいらないかもしれないなどと考え、自身の心境を「世界中のいっさいの欺瞞家も、自己欺瞞家にくらべたらもののかずではない、私はこんな口実で自分をあざむいていたのである」(213)と告白する。また、エステラと会った後も、「正直に言ってそれまでにもジョーに会いに行こうという気持ちが多少でも残っていたかどうか、大いに怪しいものだ」(224)と語る。このようなピップの回顧的語りは、紳士階級の仲間入りをした彼が、紳士階級としてのアイデンティティを維持するため、自分から故郷を切り離したいと考えていたことをよく示している。しかし、ピップの願望に反し、故郷は彼を捕らえて離さない。ウェミック(Wemmick)とニューゲイト(Newgate)監獄を訪れた後で、ピップは自身の心境を語るが、ピップの語りは、彼がロンドンのニューゲイト監獄訪問により、子供時代故郷で囚人と出会い、彼を助けたという記憶を思い出したことを示している。シュワルツバッハ(F. S. Schwarzbach)は、ピップが子供時代を牧歌的な

おとぎの国ではなく、不快な腐敗させるような社会の習慣と影響がある場所で過ごしている、と指摘しているが(Schwarzbach 187)、イギリスの監獄事情とマグウィッチの人生と関わる牢獄船、ニューサウスウェールズ(New South Wales)への移送は、密接な関係にある。ニューゲイト監獄は、長期にわたって囚人であふれかえっていた。ニューゲイト監獄は、本来 427 人収容されるように作られていたが、1818 年 822 人も収容していた。監獄は衛生状態が悪く、年齢、性別にもかかわらず収容していたので混乱状態にあった(Paroissien 271)。一時的な監禁場所としての老朽船の使用や流刑は、イギリスの混乱した監獄の問題の解決策であったので、ディケンズがピップのニューゲイト訪問後の語りにより巧みにイギリスの監獄事情を暗示していると言える。

一方でピップの回顧的語りは、個人的記憶により故郷とロンドンを結びつけている。このようなピップの回顧的語りから、故郷はピップにとって空間的存在であるだけでなく時間的存在であると言えるが、故郷の時間的存在としての意味は、帰国禁止命令に逆らいマグウィッチがピップに会いに来るときさらに明らかとなる。ピップは、かつての脱獄囚が自分の部屋に来たことに気づき、彼が「わしはおまえの二番目の父親だ」(304)と言い、自身が大いなる遺産の出所であることを明らかにしたとき、一瞬にして故郷を思い出し、「来てくれなどしなかったらよかったのに！あの鍛冶場にそっとしておいてくれたらよかったのに！たとえ満足してはいなかったとしても、これに比べたら幸福だったのに！」(306)と語る。ピップは、ミス・ハヴィシャムが自分とエステラを結婚させようとしているという夢が砕け去ったことを知り、自分がジョーやビディのところへ戻れないと思う。ピップは、「彼らの単純さと誠実さが与えてくれるような慰めは、この世のどんな賢人でも与えてくれることはできなかつたろう。ただ、それだからといって、いったん自分が犯したことを、もと通りに戻すことは、決して、決してできないのだ」(308)と語るが、ピップの語りは、ジャック・ローリンズ(Jack Rawlins)が指摘しているように、ピップが虚栄心から自身をエステラに強く印象づけ、彼女の愛を得るため、金持ちで偉い人間になりたかった、またそ

のため友人たちを捨てた、という本心を示している(Rawlins 88)。このピップの語りはまた、彼が最初ジョーやビディとの間に感じていた階級的境界線が倫理的境界線へと変化していることを示している。ピップは後に、エステラが殺人の嫌疑がかけられた女性とマグウィッチの間にできた子供であり、紳士きどりのコンピソンに捨てられたミス・ハヴィシヤムの養女にされたことを知り、さらにその倫理的境界線を強く感じる。

ピップの倫理的境界線は、紳士階級からの陥落後、かつて階級の違いによりジョーを疎ましいと感じたことを彼が心から反省したとしても、ジョーがピップの看護をし、彼の借金を払い、彼を赦さなければ取り払われることはない。トマス・ロー(Thomas Loe)は、「ビルドゥングスroman(Bildungsroman)のプロットという観点からピップの旅は、彼の成長のメタファーであり、ジョーはかつてのピップがいた基準、自身について正確な判断をするため戻らなくてはならない基準を象徴している」と述べているが(Loe 204)、ピップが、「ああ！私はジョーに自分の誠実を疑わせ、順境になったら、彼に対して冷淡になり、彼をふり捨ててしまおうと考えさせる理由を、少しも与えなかったであろうか？」(445)と語る時、ピップにとってジョーが倫理的基準となっていることが明らかとなる。このように考えると、ピップの回顧的語りは、階級的アイデンティティを意識させる語りから倫理的アイデンティティを意識させる語りへと変化し、作品のテーマ「本当の紳士とは？」を読者に強く意識させる語りと言っていい。

結論

以上、*Great Expectations*をピップの語りと階級をめぐるアイデンティティという観点から考えてきたが、ピップの語りは、大人になった現在から過去を語ることから回顧的であると言えるが、彼の人生におけるできごとと密接に関わりがあることを示している。子供時代マグウィッチと姉の力は最初、暴力的・威圧的力としてピップを支配していたが、サティスハウスに出入りすることによりピップは、階級的力を意識するようになり、紳士階級の仲間入りをすることにより、ピップはジョーを

疎ましく感じ、彼に対し、階級的境界線を感じる。しかし、その後マグウィッチが現れ、紳士階級から陥落することにより、ピップの感じる階級的境界線は、倫理的境界線へと変化し、ジョーの赦しにより境界線が取り払われ、ピップは倫理的基準を持つようになる。このように考えると、ディケンズは、ピップの階級的アイデンティティと密接に関係している回顧的語りにより、自身の見解「倫理的に正しくなければ、本当の紳士とは言えない」を効果的に読者に示している、と言っていいだろう。

Works Cited

- Beatty, Bernard. "Two Kinds of Clothing: *Sartor Resartus* and *Great Expectations*", in *Reading Victorian Fiction*. Ed. Alice Jenkins and Juliet John. London: Macmillan, 2000.
- Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus*. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Connor, Steven. "The Imaginary and the Symbolic in *Great Expectations*", in *Great Expectations: Contemporary Critical Essays*. Ed. Roger D. Sell. London: Macmillan, 1994.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. New York: Oxford UP, 1992.
- Loe, Thomas. "Gothic Plot in *Great Expectations*", in *Great Expectations: Contemporary Critical Essays*.
- Martin, Graham. *A Study Guide to Great Expectations*. Milton Keynes: The Open UP, 1982.
- Paroissien, David. *The Companion to Great Expectations*. Mountfield: Helm Information Ltd., 2000.
- Rawlins, Jack. "*Great Expectations*: Dickens and the Betrayal of the Child", in *Great Expectations: Contemporary Critical Essays*.
- Sadlin, Anny. "*Great Expectations* as Romantic Irony", in *Great Expectations: Contemporary Critical Essays*.
- Schwarzbach, F. S. *Dickens and the City*. London: The Athlone Press, 1999.

Great Expectations: Pip's Identity and Retrospective Narrative

The purpose of this paper is to show the relation between Pip's identity and narrative which is connected with his class consciousness in *Great Expectations* (1861). Pip's narrative is retrospective because the adult Pip tells his past life, and has relevance to his past experiences. In his childhood Pip is controlled by the violent power of Magwitch and his sister, but Pip comes to be aware of power of class once he can spend time with Miss Havisham and Estella at Satis House. After he joins the class of gentleman, Pip cannot stand Joe and his habits and feels a boundary line between Joe and Pip in class, but later it changes into the boundary line in ethics. By Pip's retrospective narrative which is related to his class identity, Dickens not only shows Pip's mental development but also demonstrates his opinion that no one can be a true gentleman if he is not upright in ethics.

出典:『中国四国英文学研究』第2号(日本英文学会中国四国支部,2005)
67-77.